九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

デカルトにおける延長の認識について

西本，惠司

https://doi.org/10.15017/2328599

出版情報：哲學年報. 41, pp.205-219, 1982-03-31. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：

デカルトにおける延長の認識について

西本恵司

デカルトはエリザベト宛のよく知られた書簡において、三種類の本源的観念を区別しそれぞれが独自の仕方で認識されることを述べているなかで、拡がり（extension）或は延長（étendue）の認識について次の如く語る。「物体、即ち拡がり、形、運動は、悟性のみによっても認識されうるが、想像に助けられた悟性（l'entendement aidé de l'imagination）によって一層よく認識されうる。[1]」物体的諸観念、それは拡がり、形、運動更に数学的観念などであるが、それらは悟性のみによっても認識されうるけれども、想像に助けられた悟性によっての方が一層よく認識されうる、と語られている。同様の主張は初期の著作である『規則論』において既に表明されていた。そこでは悟性（intellectus）が物体的ではないものにかかわる場合には、感覚を遠ざけ、想像からすべての印象をできる限り除き去るべきであるが、「しかし、もし悟性が物体に関係をもちうる何かを吟味しようと意図するならば、そのものの観念は、できる限り判明に想像のうちに形成されねばならない」（傍点筆者）と述べている。[2]

物体的なものの観念（数学的なものも含む）が対象であるとき、一人悟性のみによるのではなく、想像と共働する悟性、想像に助けられた悟性によって、それらはよりよく認識されるというのが、デカルトの一貫した主張であった。では何故デカルトは物体的なものの認識、延長の認識において想像の助力の必要性を力説するのか。我々は以下において、延長の認識における想像の役割を考察することをとおして、延長の認識が孕む問題を指摘しようと考える。

(一)

我々はまず『規則論』における物体的なもの（とりわけ延長の）認識に関する議論の考察からはじめよう。『規則論』は周知の如く、「認識する我々」と「認識されるべきものそのもの」とに分けて論述しているので[3]、我々もそれに沿って進めよう。

主観の側即ち「認識する我々」の側の要件のうちで最も重視されねばならないのは、悟性（＝知性）的直観（intuitio）である。「ただ悟性のみが真理を把握（percipere）し得る[4]」のであり、この直観は「純粋なかつ注意せる精神の不可疑の把握（conceptum）[5]」である。直観は精神（mens）のはたらきであるが、しかし「純粋な注意せる」精神のはたらきである。ここで「純粋な」という形容が意味するところは、感覚の変りやすい信念に基づくのでもなく、想像の虚構から生ずるのでもなく、ただ「理性の光」のみに由来する精神のはたらきであることを意味する。つまり直観は「悟性のはたらき（intellectus actiones）」の一つなのである[6]。もう一つのはたらきは演繹（deductio）である。演繹と比較して直観の有する特性は「現前の明証性（praesens evidentia）」を有するということである[7]。直観的把握はまのあたり明らかに観られるという意味で「現前の明証性」を有し、「全体同時に（tota simul）[8]」観るのである。それに対して演繹はより複雑な認識に達する方法であり、それには単純な知から始めて推論を積み重ねてゆく他ない。ここに直観以外に演繹という別の認識様式の必要性があるのであるが、演繹はこのように思惟の継起・運動[9]を含む故に、それによって得られる知の確実性は記憶（memoria）に依存している。従って演繹による知は「現前の明証性」を有さず又「全体同時に」観られた知ではない。デカルトはこの演繹による知を直観知に高める必要性を強張し、その手段として枚挙（enumeratio）を重視したが、ここではそれについては触れない。

次に、直観による把握には「不可疑」という性格が挙げられているが、その理由はこの把握が何の疑いをも残さぬ

ほど容易で判明であり、しかも単純であるからだと語られている。直観の容易さ単純さは直観の対象の性格に由来する。というのも、この『規則論』は確実な知識を得るための方法（methodus）を提示しており、その方法は、複雑なものから単純なものを区別し秩序（ordo）と段階とにおいて最も単純なものの直観から始めて、演繹により、より複雑なものの確実な認識を獲得せんとすることにあったのであるから、直観の容易さ単純さ判明さは、その対象の単純さに由来すると言える。デカルトは数論（Arithmetica）と幾何学（Geometria）とを確実な学問と見なしているのであるが、その理由として「純粋な単純な対象を取扱っているので、経験によって不確実にされるおそれのあるどんなものも前提せず、理性的に演繹される諸々の帰結のみから成立している」[10]ことをその理由としているのである。直観は「理性の光」にのみ基づく悟性（＝知性）的なはたらきであり、それが判明で不可疑であるのは、このはたらきの純粋性とともに、その対象の単純性による。

さて直観の対象であるが、デカルトは三つのものを挙げている。まず、単純本質（naturae simplices）と言われるもので、それには三種類ある。純粋に悟性（＝知性）的なもの、例えば認識とは何か、疑いとは何か、意志のはたらきとは何か等についての認識で、それらは純粋悟性によってまた「ある生具の光」[11]によってのみ認識されるものである。純粋に物質的なもの、例えば形、延長、運動等がそれであるが、これらは「物質的なものの像を直観する悟性」[12]（傍点筆者）によって、即ち想像に助けられた悟性によって、よりよく認識される。その他両者に共通のもの、例えば存在、一、持続等であり、それには公理も含まれる。これらの単純本質の他に、単純本質相互の必然的関係も直観の対象である。更に、「悟性が悟性自身のうちにか想像のうちにか存在すると正確に経験する他のすべてのもの」[13]が直観の対象である。

ではこのような直観的性格を有する純粋に精神的なはたらきが、他の認識能力即ち想像・記憶・感覚とどの様な関係を有するか、とりわけ想像との関係を次にみてゆかねばならない。この純粋に精神的なはたらきは認識力（vis

cognoscens）と言われるが、「（この力は）もしそれが想像とともに（cum imaginatione）共通感覚（sensus communis）に向かうならば、見る、触れる等と言われ、もしそれが種々な形を帯びたものとしての想像にのみ向かうならば、想起する（reminisci）と言われ、もしそれが新しい形をつくるために同じ想像に向かうならば、想像する（imaginari）、或は表象する（concipere）と言われ、最後に、それが単独にはたらくならば、理解する（intelligere）と言われるが、それは一つの同じ力なのである。[14]」そしてこの同一の力はそれぞれの機能に従って、純粋知性（＝悟性）（intellectus purus）とも、想像とも、記憶とも、感覚とも名付けられるが、それらのうちここでは想像に注目しそれがどのように規定されているかを見てゆこう。想像は認識力が「新しい形をつくるために想像に向かう」はたらきである。この後者の想像はデカルトにおいては身体的器官と考えられており、その機能は、外部感覚が受動的に受け取る形を共通感覚を介して受け容れるはたらきである。しかしこの想像（デカルトは時に phantasia という語を用いているが）は単に受動的なはたらきだけではなく、共通感覚から由来する形を形または観念（figurae vel ideae）として受け容れる[15]と語られているように、既にそこにはある種の綜合的機能が見出されるが、[16]そのような受動的な身体的想像にはたらきかけて、新しい形或は観念を形成すること、それが想像であるとデカルトは言うのである。我々はここでデカルトが二つの想像を区別していることに注意して置く必要がある。一つは受動的作用としての想像、即ち感覚像（phantasma）としての想像であり、他方はその想像にはたらきかけ、悟性と共働して新しい形或は観念を形成する精神の能動的作用としての想像である。そしてこの区別は想像という作用が有する〝二面性〟と〝媒介性〟とを我々に知らせる。〝二面性〟とは、想像はある特定の物体的なものの像と相関的であるという意味では、実際的には常に個別的な形・像とともにありながら、他方では、「新たな形」を形成する能力として、開かれた可能性をそして更に言えばある種の自由性を有しているということである。想像のこの二面性、特に後者の点については(二)において更に考察されるであろう。〝媒介性〟に関して言えば、それは感性的なものと悟性的なものとの媒介

であり、それによって我々は物体的なものに関する様々な観念を持つことができるのである。想像においては「精神は自己を物体の方に向け、そこに精神自身が形成した観念か或は感覚によって受け取った観念に合致する何らかのものを考察する。」[17]つまり想像において精神は物質的なものに出合うのである。

ところで先に述べたように、デカルトは延長の認識に想像の助力が必要であることを主張しているのだが、一方でデカルトは純粋悟性によってのみ延長の認識が可能であることを述べている。単純本質の一つに挙げられていた延長は「我々の悟性に関して単純なもの」[18]なのであり、明らかに純粋悟性の対象である。また、想像における物体的延長は延長自身ではないと語られていることからもそのことは示されている。例えば「延長は物体ではない」という表明は想像によっては理解されない。というのも想像は物体の表象に他ならず、想像には「延長的物体の観念」[19]しかないのであり、延長と物体とは区別されないのである。純粋悟性のみが延長という「抽象的存在」[20]を分離しうるのであるが、そのような延長は「想像によっては受け容れられない」[21]とデカルトは言う。つまりデカルトは一方では延長の把握が純粋悟性によることを明確に述べているのである。

しかし他方で、単純本質の一つである延長が「物質的なものの像を直観する悟性」によって認識されると述べたり、『第五省察』では長さ・幅・深さにおける拡がりを「判明に想像する」[22]と語り、『第六省察』では「幾何学の対象である物体本性の他に、更に多くの事柄を私は想像する」[23]と述べている。

この様に一方で延長の認識が純粋悟性によると語られながら、他方では想像による助力が繰り返されているのである。この想像の助力がかくも力説される理由はどこにあるのであろうか。勿論、それは単に想像が物質的表象にかかわるということにだけ存するのではない。我々は延長の認識そのものが、想像の助力を必要とすると考える。そのことを『第二省察』における「蜜蠟（cera）の分析」を検討することによって考察しようと考える。

(二)

延長の認識は直観による。我々は(一)において、デカルトにおいては知性のはたらきが直観的性格を有すること、そしてその把握は「現前の明証」を有することを見てきた。我々は、延長の認識が直観によることと、更に(一)で述べた想像の二面性とを二つの鍵としながら、蜜蠟の分析を検討することによって、何故延長の認識において想像の助力が必要とされるのかを考察したい。まず、この分析の立場を明らかにしておきたい。この分析は Cogito の地平でなされている。その地平では思惟の対象は観念である。感覚的であれ、想像的であれ、観念の場においてそのものの本質が問われているのであり、蜜蠟が現実に存在するか否かは問の外にある。そしてこの蜜蠟の分析が問うのは蜜蠟の本質は何であり、それがいかなる認識能力によって認識されるかである。結論的に言えば蜜蠟の本質は延長即ち《屈曲しうる、変化しうる、延長するもの》であり、それは悟性によって把握される。しかもそれは直観的把握である精神の洞察（mentis inspectio）である。ところで本質とはそれによってそのものの自己同一性が語られるものであるから、蜜蠟の自己同一性は延長によって把握されているのである。我々はこれから、いかにしてその同一性が延長において把握されるにいたるかを中心に、この蜜蠟の分析を検討してゆきたい。そして想像の役割がどのようにそれにかかわっているかを見てゆこうと考える。

蜜房から取り出されたばかりの、あらゆる感覚的性質をそなえた蜜蠟がある。これを火に近づければほとんどの感覚的性質は変化するか消え失せてしまう。デカルトはこの変化の後に、「なお同じ蜜蠟（eadem cera）が存続しているであろうか」と問い、同じ蜜蠟が存続していると認めねばならないし、誰れもそれを否定しないと言う。それでは我々は eadem cera の eadem をどこで把握しているのであろうか。[24] まず感覚的諸性質の知覚によってその同一

性を把握しているのではないことは明らかである。何故ならそれらはほとんど変化しているにも拘らず、なお我々は同一の蜜蠟が存続していると判断しているからである。従って、我々は感覚的諸性質の知覚以外のところで同一性を把握していると言わねばならない。ではどこでであろうか。デカルトの考察を追ってみよう。

デカルトは次の様に考える。即ち、「蜜蠟そのもの」は「恐らくそれは今現在私が思惟するところのものであった。つまり蜜蠟そのものはそうした蜜の甘さでも、花の香りでも、そうした白さでも、形でも、音でもなかったのであって、少し前にはそうした仕方で私にまざまざと現われたが、今は別の仕方で現われているところの物体である。しかしこの様に私が想像するところのものは厳密には何であるのか。」[3] 我々は蜜蠟が何であるかを次の様に語ることができる。つまり蜜蠟は先には斯く斯くの感覚的諸性質を有する物体であったし、少し前には斯く斯くの物体であり今はまた斯く斯くの物体であるという仕方で蜜蠟を語ることができる。しかし、そのような仕方で語ることが可能な根拠はどこにあるのか、それが問われなければならない。いかなる物体（もの）として蜜蠟が把握されているが故にこの様に想像もでき、語ることもできるのかが問われなければならない。それは、蜜蠟が《屈曲しうる、変化しうるところの延長するあるもの》であるという把握によるとデカルトは言う。ではこの把握は何によってまたどのようにして可能なのであろうか。それを考察してゆこう。

この把握における、《屈曲しうる、変化しうる》とは何を意味するのであろうか。それはこの蜜蠟が四角な形から丸い形へ、丸い形から三角な形へ移りゆくことができる、単にそのようなものであることを意味しているのではない。我々は確かにこのような移りゆきを想像することができる。想像は㈠で述べた様に、変化の可能性にかかわっている。しかし問題はこのような移りゆきをたどりうることにあるのではなくて、そのような変化にも拘らず、それらがそれぞれ「この蜜蠟（蜜房から取り出された）」であることをいかにして捉えうるかにある。《屈曲しうる、変化しうる（もの）》という把握は、それを可能にする把握なのである。つまりこの把握は多様な変化の可能性を意味

するのではなく、その様々な変化が「この蜜蠟」の変化であるという同一性の把握に他ならない。この把握についてデカルトは次の如く言う。それは「この蜜蠟がこのような無数の変化（mutationes innumerabiles）を容れうる」[26]という理解（comprehensio）であり、そしてこの理解は悟性の洞察（直観）である。というのも、「私はこの蜜蠟が無数の変化を容れうることを理解するが、実際想像することによってその（変化の）無数を通覧することはできないのであるから、この理解は想像の能力によっては果されない。」[27]確かに想像は先に述べた様に、四角形から丸い形へという変化の可能性を捉えるが、それらを通覧し尽すことはできない。従って「無数の変化を容れうる」という理解は想像によるのではなく悟性の直観である。とは言え、この理解が想像を越えた悟性の直観であるとしても、その直観は想像によっては尽しえない「より以上」の変化がありうるということの把握ではないであろうか。つまり、我々はここで想像の役割の重要性を見ようとしているのであるが、悟性のこの直観は「想像によって尽しうるもの」を媒介にせずには――そしてそれ「より以上」のものという仕方でしか――得られないのではないかと考える。そのことは≪延長するもの≫という把握についてデカルトが述べていることのうちにも充分示されている。蜜蠟は≪屈曲しうる、変化しうるところの延長するあるもの≫と把握されるが、この≪延長≫について次の如く言われる。「蜜蠟が何であるかを、もし蜜蠟が延長において、かつて想像によって包括したよりも一層多くの変化を容れると考えるのでなければ、正しく判断したことにはならないであろう。」[28]≪延長するもの≫という把握は悟性の直観であり、想像を越えた把握である。しかしここでもその把握は、想像におけるよりも「より一層多く」の拡がりにおける変化の把握として語られている。つまりこの把握は想像を媒介とした悟性の直観的把握と言えよう。我々はそこに「延長性」の把握における想像の役割を見ようとするのであるが、延長の把握を正確に捉える為にも、デカルトにおける延長とは何かを考察し、更にここで敢て使用した〝媒介〟という言葉の意味を限定してゆかねばならない。

(三)

さて我々は(一)で「延長」の観念について二種類考えられることを述べた。一つは純粋悟性の観念であり、他方は想像的観念である。想像的観念は延長する物体の観念であり、物体の観念は想像的なものを含まねばならない。「我々が想像の内に形成するのは二つの別々の観念、一つは物体の観念、他は延長の観念なのではなく、ただ一つの延長せる物体の観念である。」[29] これに対して延長の悟性的観念はいかなるものと考えられているであろうか。延長は延長実体の属性であり、その本性を構成するが、その延長と個々の特殊的な形等との関係は様態の関係である。従って延長は個々の形等に対して一般者であるが、しかしその一般性は個的なものから全く離れたものであろうか。(一)で見た様に確かに想像的観念に比して純粋悟性は抽象的な延長の観念を捉えうると語られている。しかし蜜蠟の分析において考察してきたように、延長の悟性による直観的把握は決して個的なものから離れてはいない。まず直観ということ自体、(一)で述べた様に、デカルトにおいては「現前の明証」を有し「全体同時に」捉えることであった。この分析の場合、感覚的観念、想像的観念を離れて直観されているわけではない。むしろかかる知覚的経験が土台なのであり、その経験から離れることなく「現前の明証」を保持しつつ延長は捉えられているのである。しかしこのことは決して「延長」の把握が経験的抽象によってなされるということを含意しているわけではない。[30] ただかかる知覚的土台を離れることなく一般者が把握されているということである。

ではかかる一般者としての延長とはいかなるものであろうか。デカルトは周知の如く無限（infinitum）と無際限（indefinitum）とを区別し、無際限なものとして世界（宇宙）の延長、物体の可分性、星の数（数の多）等を挙げている。[31] 無際限は、いかなる点からも制限が見出されないという積極的な意味での無限（それは神についてのみ語られる）に比して限界が見出されないという消極的な現定である。延長についてデカルトは次の如く言う。「我々はそれ

以上大きな延長はありえないと理解されるほどの大きな延長は想像されえないのであるから、可能な諸物の大きさは無際限であると言う。[32]」また数の多さについては、「これ以上はもはや神によって創造されてないと信じられるほど、それほど多くの星の数は想像されえないから、その数を無際限だと想定する。[33]」（傍点は共に筆者）無際限は限界が見出されないということであるが、それはこれ以上の大きさ・数はないと「想像されえない」ということに即して捉えられていることに注意せねばならない。常にそれ以上のものが想像されるが故に無際限なのである。そして強いて言えば無際限性自身は想像によって捉えられるわけではないとしても、想像を離れては捉えられず、それを介してしか捉えられないのではないであろうか。ところで、無際限としてかく語られる延長は、物体の本質としての延長ではなくより広義の空間性（「世界の延長」という表現が示すように）について言われることではないかという疑問が出されるであろう。しかし両者はデカルトにおいては同一の延長であり、物体の本質としての延長も同様の語り方がなされているのである。例えば次の如く言われる。「我々は極めてよく、そこにおいては延長しか考えられない無限定で無際限な大きさの連続体（corpus continuum indeterminatae magnitudinis, sive indefinitum）を把握（concipere）しうる。[34]」また『第五省察』では「ものの観念」として連続量或はむしろ「長さと幅と深さとにおける量をもつものの延長[35]」を判明に想像すると語る。（後者の引用は連続量を無限定なものと考えると、「判明に想像する」という表現は不適切であるが、限定された連続量とすれば想像こそがこの連続体を判明に表象するのである。）延長はそれが広義の空間性について語られようとも、物体の本質として考えられようとも共に無限定で無際限なものである。

ではかかる無限定で無際限な延長は、いかにして我々に認識されるのであろうか。我々はここで蜜蠟の分析に関するラポルトの説を考察しよう。[36]

蜜蠟が≪屈曲しうる、変化しうる延長するあるもの≫であるというこの把握が、感覚や想像を越えていると言われるのは、この認識には「無限の特定化（spécifications）の可能性の意識[37]」が含まれているからであると、ラポルト

は考える。そしてこの意識には「与えられた延長を広げ、縮め、増し、分割する限られていない能力」[38]についての意識、つまり与えられた延長について無数の多様な輪郭を表象する能力についての意識が含まれているのであり、この能動的で限りを持たない能力は我々においては意志（volonté）しかない。従ってラポルトは蜜蠟のこの把握の根源には意志の働きがあると見るのである。[39] この意志の働きは抽象と普遍化（généralisation）として考えられている。意志的働きは異なった無数の表象を可能的に（virtuellement）喚起しうる能力として考えられているのであり、そのことのうちにあらゆる分割或は限界づけからの抽象と普遍化との源泉を見ようとするのである。そして悟性的直観の根源にあるこの意志的働きが、抽象と普遍化とによって想定するものこそ、未だ分割されておらずいかなる形態も有しないが、あらゆる分割を容れうる連続体（continuum）であるとラポルトは考える。[40] さて、延長の悟性的観念をこの様に無限定な連続体として捉えると、それと延長の想像的観念との関係は、無限定なものと限定的なものとの関係に他ならないであろう。というのも悟性的観念の均一性を分割化するのは、感覚像に他ならないし、想像とは限定された特定の延長体に他ならないからである。[41] デカルトが『第六省察』において悟性と想像との違いとして、想像には「ある特殊な精神の緊張（contentio）」[42]が必要であることを述べているが、ラポルトによればそれは、図形の心的（mentale）な構成における努力感、或は表象を喚起し構成する傾向性（tendence）を意味し、それはまた、無限の定なものを限定すること、或はむしろ可能的なものを現実化することにおいて感ぜられる努力感であると考えられている。[43]

このラポルト説の中心は悟性的直観或は想像という知的作用の根源に意志的働きを見ようとするところにある。前者では抽象と普遍化に即して、「無限の特定化の可能性の意識」において意志の働きが見出されており、後者ではある固有性に基づいた（それ自身は悟性的なものであるが）表象を喚起し構成する傾向性として意志的働きが語られている。そして後者が無限定から限定へ、可能性から現実化へもたらすことであるのに対して、前者は無限定で可能的

なものへの遡行である。従ってまたラポルト説において重要な点は、延長の想像的観念と悟性の延長的観念とが、同じ一つの延長に関する限定的なものと無限定的なものとの関係として考えられている、ということである。限定された連続体としての物体の観念が延長の想像的観念であり、無限定で無際限な連続体の観念が延長の悟性的観念なのである。しかし無限定で無際限な連続体の観念を、それ自身として我々は形成しうるであろうか。例えば三角形一般の観念について言えば、個々の三角形とは別に、三辺によって囲まれた図形であり、内角の和が二直角である等々と、辺や角の相互の関係の観念として三角形一般の観念を有しうる。しかしそれと同様な仕方で、拡がり一般の観念を形成しうるであろうか。

ラポルトの考えによれば、悟性的認識の対象は抽象的一般であり、無限定で可能的なものと考えられている。しかし我々は無限定な連続体を抽象的一般として悟性的にそれ自身として認識しうるであろうか。デカルト自身は直観であるとして、一般的概念とは考えていないのではないか。確かに延長は個々の形態等に対して一般者ではあるが、デカルトはそれを個に対する類或は種としての一般性としては考えていないのではないか。我々は拡がり一般などを思惟することはできないであろう。直観された延長は概念的一般的な延長ではなく、本質でありながら現前しているものである。

我々は㈡において延長の直観的把握は想像を媒介としていると述べた。この媒介はラポルトの言う抽象を意味しない。そして延長の悟性的観念と想像的観念とはラポルトの言う無限定なものと限定的なもの、或はむしろ可能なものと現実的なものとの関係ではなく、無限（無際限）と有限との関係であると我々は考える。そして無際限的なものは、有限的なものを介してしか捉えられないと考えるのである。㈠で見たように、想像きは二面性を有している。想像は一方で感覚像を受容するという受動的能力である。その意味で個的で限られたものの受容である。しかし他方想像は「新しい形」を形成する能動的能力である。つまり、想像は常に個的で特殊的な表象像とともにあるが、しかし常に

それとは別の「新しい形」を形成する能力であり、そこにある種の自由性が語られる。従ってそこにラポルトのように意志的働きを見ることもできよう。この能動的な想像作用が、延長の認識において重要な役割を果す。延長は先に見たように無際限な拡がりである。それは常に「より以上」が想像される拡がりであると規定される。延長のこの無限性は、想像を越えたものとして、しかし想像を介してしか把握できないと言わねばならない。その意味から、延長の悟性的把握はラポルトのように抽象一般ではなく、どこまでも想像と相即的であり、全く抽象的なものではなく、想像的なものを含むと言わねばならない。延長の無際限性は、想像と相即することによって、つまり想像的なものを介してしか把握しえないと考える。デカルトにおける延長の認識においては、想像のかかる二面性が重視されねばならない。延長の直観は個的なものに即しつつなおその同一性を把握するものである。言い換れば、感覚像を離れることなく、しかもその無際限な変化が把握されねばならない。ここに想像の果たす重要な役割がある。デカルトが延長の認識においては悟性だけよりも、むしろ「想像に助けられた悟性」を重視するのも、まさにここにその理由があると言わねばならない。

註

(1) Lettre à Élisabeth, 28 juin 1643.
(2) A. T. X. 416-417.
(3) A. T. X. 411.
(4) A. T. X. 411.
(5) A. T. X. 368.
(6) A. T. X. 368.
(7) A. T. X. 370.

(8) A. T. X. 407.

(9) A. T. X. 369.　演繹において推論のそれぞれは必然的関係を有していなければならないことは当然のことであるが、この必然的関係の把握は直観によらなければならないから、演繹は「一つ一つのものを明瞭に直観してゆく連続的でけっして中断されることのない思惟の運動」に他ならない。デカルトはその連鎖の全体を枚挙によって直観する必要があることを強調する。

(10) A. T. X. 365.

(11) A. T. X. 419.

(12) A. T. X. 419-420.

(13) A. T. X. 425.　この引用中の想像は phantasia であり、感覚像 phantasma (X, 423) に相当する。この引用は従って、知的認識力によって直観されるもののうちには、像的なものが含まれることを意味している。

(14) A. T. X. 415-416.

(15) A. T. X. 414.

(16) 「梧性は想像 imaginatio から受け取るすべてのものが事実想像のうちに画かれていると判断するけれども、そのものが外物から感覚へ、感覚から想像 phantasia へそっくりそのまま移ってきたものだとは主張しない。」(X, 423)

(17) A. T. VII, 73.

(18) A. T. X, 419.

(19) (20) (21) A. T. X. 444.

(22) A. T. VII, 63.

(23) A. T. VII, 74.

(24) A. T. VII. 30.

(25) A. T. VII. 30-31

(26) A. T. VII. 31.

(27) A. T. VII. 31.

(28) A. T. VII. 31.

(29) A. T. X, 444.

(30) 「精神によってしか把握されることのないこの蜜蠟はいかなるものであるか。確かに私が見、私が触れ、私が想像するものと同じもの、つまり初めから私が思いなしていたのと同じものである。」（A. T. VII. 31）蜜蠟が何であるかの直観（洞察）は現前の明証を有するのである。それはもとより視覚等によるものでないことは明らかであるが、それらから乖離したものではない。

(31) A. T. VIII-1, 15 (Princ., 1, 26, 27).

(32)(33) A. T. VIII-1, 15 (Princ., 1, 26)

(34) A.T. V, 269, Lettre à Morus du 5 février 1649.

(35) A. T. VII, 63.

(36) J. Laporte : Connaissance de l'étendue chez Descartes, Revue Philosophique, 1937.

(37) ibid. p. 270.

(38) ibid p. 272.

(39) ibid. p. 273.

(40) ibid. p. 273.

(41) ibid. p. 276.

(42) A. T. VII. 73.

(43) J. Laporte : ibid. p. 280-281.